

【J区】

- この調査区では、トレンチ調査により石垣の背後の構築状況を確認することができました。裏込石と背面積土（版築土）の間に50～60cm大の比較的大きな石を意図的に配していることが分かります。
- 下段の石垣が上段と並行していることが確認され、当時はこの部分を通路として利用していたと考えられます。

【K区】

- K区では、北端尾根部分で上下2段の石垣に加え、3段目の石垣を確認しました。
- 上段石垣の間詰石にデザイン性に持たせた配置をしている箇所が見つかりました。

2 石垣について 【資料 2・4】

(1) 石垣の詳細情報

使用石材：ほとんどがチャート（小牧山産）。ごく一部に花崗岩（岩崎山産）を用いる。

切り出したものではなく自然石を利用している。

構築技法：野面積み・布積み（横目地がおおる積み方）

推定石垣高：2～2.5m。北西端部分では3.8m。

石垣勾配：70度。上段・下段ともほぼ統一した勾配で積み上げている。

隅角部：算木積みは採用していない。調査したほぼ全ての隅角部が欠損している。

石垣控え：平均1～1.5m。大きいものでは2mのものもある。

石垣の重量：調査のため移動した2石については2tおよび2.2t。

裏込石：小牧山産のチャート（拳～人頭大白色角礫）が主体。一部に丸礫（川原石）を含む。

その他：①下段・3段目の石垣は擁壁の役割という意味合いが強いが上段は意匠を凝らして配した部分もあり、来訪者に対する視覚的效果を狙っていると思われる。

②花崗岩材の石垣背面に「〇に十」の刻印あり。慶長期・名古屋築城に伴う石材調達に伴って小牧山城の石垣を転用しようとした痕跡と考えられる。

(2) 小牧山城石垣の構築時期を永禄期（織田信長築城時）と考える根拠

小牧山城の石垣が築かれた時期について、出土した資料（遺物）による時期判定は少量のため困難です。しかし、小牧山城をめぐる歴史的経緯【付表1】からみて、永禄6年（1563）織田信長の小牧山城築城時、または天正12年（1584）徳川家康による小牧・長久手の戦いの際の改修時のどちらかに絞られることは間違いありません。

天正期の改修については、過去の調査から、石垣あるいは石を用いた形跡は一切確認できません。一方、大手道の調査では、石積を採用した永禄期の大手道を天正期の石積のない大手道が埋め立てていることが確認されています。これらのことから、徳川家康軍が天正期に主郭地区でのみ石垣を築いたとは考えにくく、小牧山城の石垣は小牧山城築城時（永禄期）に織田信長の手により築かれたものと考えられるのです。

3 まとめ（何が明らかになったのか） 【資料 3】

1 いわゆる「城」（後世の城の規範となる織豊系城郭）の石垣のルーツが小牧山城に遡る可能性が高くなりました。

従来の定説では織田信長の安土城がその後の城郭のルーツであると評価されています。安土城からはじまる城の特徴は天守と高石垣です。小牧山城と安土城は縄張り（設計プラン）に共通項が多いことがこれまで指摘されてきました。今回の調査で、信長の石への志向が小牧山城で既に具現化していることが明らかとなり、安土城築城の際に小牧山城の設計プランを焼きなおして使用した可能性も考えられます。

このことから、**織豊系城郭の原型＝小牧山城**
織豊系城郭の成立＝安土城

と評価することができるとでしょう。

2 織田信長の先駆的な築城術が明らかとなりました。

造成土・石垣の構造の調査から、信長が予想をはるかに超えた先進的な技術を以って城造りに臨んでいたことが判明しました。今回の調査で明らかとなった城の構造の主な特徴は次の4点です。

① 通説を覆す石垣高

これまで、野面積みで可能な石垣高は3mが限界といわれてきましたが、それを大幅に超える3.8mもの石垣を築いていることがわかりました。

② 2mに及ぶ主郭の盛り土造成と大規模な地形改変

過去の調査では、小牧山本来の地形を利用して、築城工事の省力化を図っているのではと考えてきましたが、今回の調査では山頂部の原形をほとんど留めないほどに改変し、城としていくことがわかりました。「山ありき」ではなく、「城（の設計図）ありき」で極めて大規模かつ先駆的な工事を実行した信長の城に対する姿勢が浮かび上がってきます。

③ デザイン性のある石垣・間詰石の配置

付表2のように、石垣を築く、という工事は信長にとって初めての事業であるにもかかわらず、極めて完成度の高い石垣を構築し、部分的には意匠を含ませる技術力の高さを見せています。

④ 裏込石・土留石の採用

排水への考慮などが目的の裏込石や背面積土の埋設等、恒久的な石垣を築くために必要な高い水準の構造を採用していることがわかりました。

これらの要素は、城造りに不可欠なものとして、後世の城に様々な改変・改良を加えながら引き継がれています。しかし、信長が何処からこれらの技術を取り入れたのか、現時点では不明です。